

期末レポート

「John le Carré : The Looking Glass War について」

*引用文は、同著からの場合は、書物名の記載はなしで、Text の Page 及び Line のみとした。

*その他の場合は、著書名を記載

*登場人物の名前、地名は全て、アルファベット書とした。

はじめに

当初この小説をテキストとして読み始めた時には、スパイ小説にあまり馴染みが無かったために、ストーリーに入りにくく、私のテキストを読む速度も遅かった。

私の理解を深めるために、DVD(COLUMBIA CLASSICS の DVD) (Leiser:クリストファー・ジョーンズ、Avery:アンソニー・ホプキンス、Leclerc:ラルフ・リチャードソン)を講義の後半に購入して、途中まで見てみたが、テキストとは微妙に違うので、私の理解が混乱するといけないうので、DVD を見ることを止めた。(DVD では、Avery はフィンランドで領事 Mr. Sutherland に年齢を聞かれて 28 歳と答えている。Text では、嘘でなければ、Peersen 警部には、32 歳だと Avery は答えている。(P.84, L16)

ところが、ある段階から、急に Text に興味が湧いてきた。連続テレビドラマの次週分が気になるように、授業の速度を超えてストーリーの先を急いで読むようになった自分に気が付いた。

それは何故だったか。自分なりに考えてみた。

- (1) 同著に限らず、スパイ小説、サスペンス小説には常套手段である結末のドキドキ感から、先を早く読みたくなったこと。
- (2) 家族との愛情、スパイ仲間とのしがらみ、結びつき、友情を微妙に描いており、単なるスパイ小説として筋を追うものだけではなく、人間と人間との関係に関心をそそられていったこと。スパイ小説を読んでいると同時に、家族の物語、恋愛小説を読んでいるような感じを受けるようになったこと。(後章で詳述。)
- (3) 本質から外れるかもしれないが、著者の風景描写の侘しさに惹かれたこと(後章で詳述)。次にどんな状況がえがかれるのか、期待しながら読み進めたこと。

以上3点はその理由と考えられた。

John le Carré の他の小説及び Ian Lancaster Fleming などの他の作者のスパイ小説を読んだことがないので、比較して述べることはできないが、この小説を通読しての私の得た印象、感想は次のようなものであった。

1. スパイがスパイ活動を行うその動機

Agent によってその動機はまちまちだと思う。

Taylor は、職を得るため、妻子を養うため、組織の一員でありたいという思いからスパイの仕事に携わっていたのではないのか。しかし、危険な仕事をする事については、不満をこぼして

いる。

彼は、「こんなやばい仕事は、サーカスの豚どもがやる仕事で、彼の組織の人間がやるべき仕事ではない。」 This was a job for those swine in the Circus, not for his outfit at all. (P. 7, L.5)

Leiser の場合その理由は Taylor とは異なるもののように思われる。恋人がいるにもかかわらず、又自動車修理工場でも職を得ているにもかかわらず、何故そんなにも危険な仕事を引き受けたのか。前大戦時にも、スパイの経験があり、ひどい目にあっているはずだ。John le Carré は我々に明確な解答を与えてくれていないが、Avery にとって、このことが頭に常に引っかかっていた。又このことはこの小説のテーマのひとつでもあると思われる。

Leiser がこの仕事を引き受けることを Haldane に電話で伝えてきた時に、Avery は 'Why did he accept?' (P.133-L.3) と叫んでいる。Leiser がこの仕事を引き受けたことは妻子のいる Avery にとって信じられないことであったと思われる。又、Oxford で Leiser と初めて会った時、Avery は、Leiser が募集に応じたことを完全に説明できる要素は一かけらもないと思っている。Yet, Avery accepted, no single factor wholly accounted for Leiser's recruitment. (P.145, L.22)

Agent がスパイ活動を行うに際して、いろいろな理由が考えられると思う。この小説では、次の要素が暗示されている。

* 「金(Money)のため」・・・多額の金を積まれれば、一発勝負でその気になる。

* 「組織の一員になりたい」・・・the Department の一人として、組織に加わりたい。

Leiser は、Oxford で Avery と散歩をしている時、我々のような組織 an outfit like ours (P.155, L.13) と ours を使っている。

* 「愛のため」・・・Oxford の彼らの住み家が気に入ったこと、この4週間に Haldane, Avery, Johnson に対す愛情が培われ、Leiser は国境を越えたのではないか。

* 「イギリスのため」・・・Leiser はイギリス人に外国人とみられることを極端に嫌っている。Haldane も、Avery に「Leiser は、徹底的にイギリス人だ。」と言っている。'British to the core.' (P.148, L.4) 又、Leiser はイギリス人のことを我々国民と言って our を付けている。Our people (P.202, L.-7)

* 「The Department のみんなが Leiser のことを覚えていると Haldane に言われたから。」・・・
「皆は君のことを覚えているよ.....これは、彼が何年ぶりかについた嘘であった。」

They remembered you.It might have been years since he had lied. (P.122, L.-9)

* 「ドイツ人を憎んでいるため」 It's the Germans: he hates them. (P.133, L.9)

* 「平和のため」 (P.270, L.25)

Avery の疑問に対して、Haldane は答えを与えなかった。

その時 Haldane は言った。「スパイは動機など関係ない。スパイを使う我々も、動機など関係ない。」 Why do agents ever do anything? Why do any of us? (P.133, L.5)

しかし、この小説の後半で、Leiser が国境線を超えた後で、農家に戻り Leiser が何故スパイ活動を引き受けたことについて、Haldane はその動機らしきことを述べている。(P.224)

その意味することを、私は十分に理解できていないが、Leiser がスパイ活動を引き受けた理由

として、Haldane は次のように言っている。

- (1) Jane Austen が言ったように、この世には「金」と「愛」しか存在しない。Leiser が金だけの為、スパイ活動を引き受けたとは思わない。
- (2) Leiser はスパイを引き受けるのはドイツ人に対する憎しみからであると言っているが、私は彼の言うことを信じない。
- (3) Leiser と最初に会った時、彼は愛を持っていなかった。
- (4) 我々の仕事では愛は裏切ることができるものである。
- (5) Leiser は当初、金のために我々の組織の作戦に加わった。でも、我々の元を去った(国境を越えて、共産圏に入った)ことは、愛のためであった。
- (6) 我々が彼に愛を育ませたのだ。

この世の中には、金と愛しかないと言う考え方は、Jane Austen の言葉のようだが、非常に割り切った考え方だと思う。しかし、このような割り切りは、Haldane のスパイ活動の長年の経験に基づき、このような割り切りをしなければ、スパイ活動など出来ないという Avery への忠告だと思われる。

2. 登場人物の人間的しがらみ

先にも述べたように、この小説は、単にスパイの作戦を追うものではなく、その背後にある家族との、スパイ同志との人間関係を描き出した人間ドラマであり、読んでいて、つい引き込まれてしまう。次の事柄について考えてみたが、何れの場合でも、組織の中でスパイ活動を行うことについての、人間性の脆弱性、虚しさを表しているように思われる。

(1) 女性とのかかわり スパイと家庭(妻、恋人、子供)

授業中の私の発言でもお分かりのように、先生の教材選択の意に反して、私はこの小説をサスペンス、スパイ小説として読むよりも、半ば恋愛小説として読んでしまったようです。(先生も勿論、スパイ小説のみと捉えられたのではなく、人間模様を含めた小説として捉えられこの小説に関心をもたれたものと思います。)

*Avery と Sarah

Oxford 大学で出会い、恋愛結婚をして、男の子 Anthony をもうけているが、Avery の仕事の性格上 Avery は家にはいないことが多い。しかも、その理由について、機密上の理由から、十分な説明がなされていないことに不満を持っている。しかも、女性と言う理由でスパイ作戦から除外されている(息子は未だ小さいが、Avery は息子がスパイ作戦に参加している想像をしている)。Sarah は「前の出版関係の仕事を辞めるべきでなかった。」と言う。'You should have stuck to publishing.' (P.22, L.24)。

しかし、不平は言うが最終的には、Avery の行動を容認してしまう。

Sarah のキスは Avery の行動を容認していることと私は解釈した。

「信念のない忠誠心。そんなことを貴方が出来るはずがない。」彼女は社会悪の一つを見つけた

かのように、完璧な冷静さで言った。彼女のキスは、彼女の信念から外れるものであった。
'Loyalty without faith. ' The kiss was like a betrayal of her standards. (P.65, L.2)

*Avery と Carol

二人の関係がどういうものであったか、それらを暗示する微妙な場面もあったが、はっきりとしたことは、最後まで分からなかった。

*Leiser と Betty

結婚していないが、一緒に暮らしているもよう。Leiser が Haldane と食事をしていつもより遅く帰った時に Betty は、お腹を空かせて待っている。他の女性と食事をしていたのではないかと疑う(P.128-129)。この時点で、私は、彼女の Leiser に対する愛情は十分あると見ていたが、同じ場面で、「彼女は彼を見つめ、そして彼女は尻を振りながら、レコードの方に歩み寄った。パートナーの手を握っているかのように、グラスを一方の手に離して掲げながら。でもそのパートナーは Leiser ではなかった。」 She watched him, moving her hips to the record, holding her glass away to one side as if it were her partner's hand, and the partner were not Leiser. (P.129, L.11)

この表現(下線部)から、私は、二人の関係はうまくいっていなかったのではと思っていた(但し、この考え方は皆さんの同意を得られなかった。彼女の単なる嫉妬のジェスチャーであったかもしれない)。そうすれば、21章(P.253)で、Anna の家に逃げていくことに繋げられると考えていた。

*Leiser と Anna

① Leiser から見た Anna

Kalkstadt の宿屋 the Old Bell で出会った Anna に対して、少年を殺してしまった不安から、人恋しさを感じたのではないか。それはどの程度のものであったか分からない。Anna に対して愛情を感じていたのか、Betty に対する愛情と比べてどうであったか、単に何かの際に部屋に逃げ込み利用してやろうと考えたのか、などは読者の判断にまかされている。これも授業中に皆さんの賛同を得られなかったが、Leiser はスパイだから、われわれの常識を超えたことを考えるかもしれないので、何があっても不思議はない。

② Anna から見た Leiser

この件についても、皆さん(特に女性の方々)の同意を得られなかったが、Anna は Leiser に仄かな愛情を抱いていたのではないかと今でも思っている。Anna はスパイではないので、密告することも考えたかもしれないが、嫌いなものを好きと表現する必要はないし、Leiser を騙す必要はない。

そうであれば、この何となく怪しげな男に対して、'I'll do whatever you want.', 'Take me with you.', 'Stay with me tonight. Stay with me!' 'Let me come with you.' 'I'll go anywhere.'(P.235)などと言えるであろうか。

そんなことを考えていると、危険も厭わないで、Leiser をかくまった Anna が気の毒に思われてくる。

しかし、Leiser は Anna に、「取り調べを受けたら、この男に無線を打つために侵入された。」と言うように命令調に言う。これも彼女に迷惑を掛けたくないと言う Leiser の優しさだと思う。

(2) スパイを使う側(controllers)とスパイ活動を実際に行うもの(Agent)との関係

Controllers と Agent との関係について、私の今まで知らなかったことで、次のことを認識させてもらった。

*両者は一体感で結ばれていなければならない。

Haldane は Avery に言う。「Leiser と何時も一緒にいるようにしてもらいたい。彼と一緒に散歩をして、射撃の練習をして、必要があれば、彼と一緒に一杯やってもらいたい。一人だけにしてはいけない。」 I want you to be always in his company. Walk with him, shoot with him, drink with him if you must. He's not to be alone. (P.147, L.-3) 「やがて Leiser は、あんたと一緒にいることを心地よく感じるようになるであろう。」 You will find he enjoys your company. (P.148, L.2)

*Leclerc も Avery に言っている。

Avery は一人の Agent に、「あくどい手を使わずに、好感をもたれることになった。Agent と Contollers との関係は、疑いで曇っている。Agent は Contorllers は自分では危険な仕事は何もしないで人にやらせる。そして、その動機を隠している。(それではいけないのだ)。我々のやり方は、the Circus のやり方とは違うのだ。」(Leclerc の本音かどうかは分からないが。)

You've induced an agent to like you. In the ordinary way — Adrian will bear me out — the relationship between an agent and his controllers is clouded with suspicion. He resents them, that's the first thing, for not doing the job themselves. He suspects them of ulterior motives, ineptitude, duplicity. But we're not the Circus, John: that's not the way we do things.' (P. 258, L.25)

*両者は愛で結ばれていなければならない。

Haldane は言っている。「彼は金を目当てに、我々の作戦に加わった。そして、愛の為に我々のもとを去っていった。(P.224, L.-10)

3. 著者の作風について

- (1) スパイ物、サスペンス物は、余韻を残すのが常道だと思われるが、曖昧な部分が多く、登場人物の意図を理解するのに苦労した。
- (2) 同じ章の中で、登場人物とか、場面がくるくると変わる。これが読者に対して刺激を与える手法として有効だと思うが、これは、急になんのことを言い出したのかと迷ってしまうことがあった。
- (3) 人間関係、人物像に力を入れている。
- (4) 状景描写のきめ細かさ、面白さ、暗さ。暗さによって、スパイ活動の背後にある人間関係の儂さ、虚しさを強調しているようだ。

4. 状景の描写

景色とか状景の描写が、随所に見られ、これが筋を追っていく際の私の憩いの場になった。一

般的に暗いイメージのものが多かったが、これは場面として北欧が中心であるためか、スパイの物語であるためか、著者の好みか不明だが、このような描写に私は引き込まれた。

例えば、

*Avery がフィンランドを訪問して、領事 Sutherland のお宅を訪問して、ホテルに帰る時の道すがらの状景で、スパイ活動の儂さ、更には人生の侘しさを表している。

「道に沿った木造の家々は、手術台の周りにはいる医者とか看護師のように、薄暗りの中で、白く光っていた。」 The wooden houses beside the road shone half white in the darkness like shadows round an operating table. (P.92, L.19)

*緊迫した事態を前にして、場違いのユーモア感のある、猫の描写。思わず何回も読み返してしまった。

「彼らはそこでの滞在中に、猫を一匹といわず、見たことがなかった。しかし、どの部屋にも猫の匂いがしていたし、Johnson がトウモロコシの入った牛肉を置いてあげると、その皿は 10 分で空になっていた。」 They never saw a cat all the time they were there, but they smelt them in every room. Johnson left corned beef on the doorstep: it was gone in ten minutes. (P.200, L.8)

*この小説の最後の部分。皆が Leiser を見捨てて農家を出た後の状景。雪(snow)を灰(ash)に例えているが事柄が事柄だけに、灰が最も適した表現で、ここが面白いと思った。

「雪は灰のように集まり、散っていった。」 Snow gathered like ash and was dispersed. (P.273, L.14)

5. 結末

(1) 結末についての登場人物各人の反応

最後に彼らは、Leiser を残して、跡形もなく引き上げる時のそれぞれの納得の仕方が特徴的である。(P.264)

*Leclerc: 「Leiser は、自分でなんとかしなければならない。それが戦時のルールだ。」と言っている。 He'll manage by himself. The war rules. (P.264, L.3)

又 Leclerc はこの作戦が失敗に終わるのを知りながら次のようにも言う。「将来同じような必要が生じたとき、Avery—Haldane のコンビで、同じ技術で、同じ施設を用いて、同じ専門知識を使うことが出来る。'I would like to feel that if a similar need arose in the future we could use the same technique, the same facilities, the same expertise — that means the Avery-Haldane combination. (P.258, L.-2)

何とおおらかで、前向きな発言なのか。(自分の失敗を反省していない、未だそんな古臭い設備を使う気かと思う反面、彼の前向きな性格には、感服する。)

そういえば同じようなことには前にもあった。第 9 章で、Avery がしょんぼりとフィンランドから帰って来た時、空港に出迎えに出た Leclerc は、「フィンランドはどうだった？」と聞きながらも、心は他にあった。これは、Agent を一人送り込むという新しい計画だが認められたからであった。これだと部下は気が楽になるが、その変り身の速さに信頼してついていけない。

‘How are things?’ he asked, his mind elsewhere. (P. 104, 最終行)

*Avery: 「Leiser をあそこに一人で置いて立ち去ることはできない。」 You can't leave him out there alone. (P.264, L.7)

*Leiser:

Leiser は一人で敵地に侵入して、少年兵を殺してしまった呵責に苛まれる。ホステルに入り込んで無線器の設定を完了し、送信はしたが、気が動転したためか、あれほど言われていた周波数を変えることなく、Anna の家に転がり込む。彼は、自分の気力、能力の限界を感じたのではないか。

しかし、Haldane, Avery, Johnson に対する感謝の気持ちを忘れていない。

(一人ホステルで無線の設定をしている時)

Avery に対して、Leiser は、初めて会ったときの Avery の温かさとイギリス人らしい品の良さを覚えていた。

Johnson に対してさえも、次のように述べている。

「Leiser が、Johnson のきちんとした、楷書書きのメモ書きを箱の蓋の裏に見つけたとき、感謝の涙があふれ出た。」

When he saw those letters, drawn out in Jack's neat, post-office hand, tears of gratitude started to his eyes. (P.241, L.7)

*Haldane:

Avery に対して「我々は必要があったから彼を送り込んだ。そして、彼を見捨てなければいけないから見捨てているのだ。新しい戒律をみつけたのではないのか。(何をぐずぐずいつているのだ。)」

Smiley に対しては、「君は卑しむべき人間だ。」

ここに Haldane の揺れ動く気持ちが出ていると思う。(Avery に対しては Leclerc や Smiley のように毅然として新しい戒律を見つけると諭し、Smiley の割り切りに対しては、卑劣な人間だとして罵っている。)

(2) 最後の箇所では分らなかったこと。

① 何故 Leiser はクリスタルの周波数を変えなかったのか。

少年を殺してしまった懺悔感、無線のキー操作がうまくできない。これらの精神的軋轢が重なって、或はこの作戦の行く末が分かったためか、この作戦を放棄したと考えるのが、妥当ではないか。

② 何故 Leiser は Anna のアパートに行ったのか。

① の理由から、人恋しくなり、誰でも良かったが、優しくしてくれる女性の元に走ったのではないか。

作戦は失敗に終わったが、何か人間関係でほのぼのとしたものを感じた。
小説一冊を読み上げたという満足感に溢れている。

6. その他

授業に出席させていただいての、感想

異質な聴講生を受け入れていただきありがとうございました。ご迷惑おかけしましたことお詫
びいたします。出席された学生さんたちは皆さん英語の読解力があり感心しました。

聴講生として、あまり発言し過ぎて、学生さんの発言が出来なくなってしまうことを恐れて、
発言をできるだけ控えるようにしていましたが、今にして思うと、結構意味のないことを喋って
しまったようです。申し訳ありませんでした。

一部の人を除いて、発言が少ないのが気になりました。皆さんも、恥ずかしがっている部分も
あると思われ、名ざしで指名されると立派なしっかりとした意見を持っているように思いました。
間違えていても、遠慮なく発言されれば、もっと充実したディスカッションが出来たと思います。

